異世界コンシェルジュ

ねこのしっぽ亭営業日誌

6

AMANA KOUTA
天那光汰

主な登場人物
Main Characters
リュカ
都の拳闘士リュートの妹。
「ねこのしっぽ亭」に住んでいたが、
現在は都で魔法学院に通っている。
レティ
河童の亜人。建設業を営む
家の娘で、リュカの友人。
渡辺美希
日本から突然やってきた、恭一郎の元恋人。
恭一郎のはからいで「ねこのしっぽ亭」で暮らすことに。
アイジャ・クルーエル
「ねこのしっぽ亭」の宿泊客。
大戦期に活躍したエルフの
魔法使いで、酒にめっぽう強い。
メオ
「ねこのしっぽ亭」の
店長を務めるネコミミの少女。
父から店を継いだ。
ヒョウカ
恭一郎が連れてきた奴隷の少女。
現在はエルダニアで本来の
土地神の役割を果たしている。
シャロン・ロプス
リュカの友人。
やり手の貴族のお嬢様で、
ホテルグランドシャロンのオーナー。
佐藤恭一郎
本作の主人公。あるきっかけで異世界にトリップし、
大衆食堂「ねこのしっぽ亭」を手伝うことになった。

1　新たな住人

「きょ、恭一郎……なの？」

ぽつりと、小さな声が草原に落ちる。その声の主は、思わず足元を見下ろした。夢じゃないかと、その足の裏側にあるしっかりとした大地を確認する。

「美希っ！」

最初に駆け寄ったのは佐藤恭一郎だった。唯一彼だけが、今の状況を理解している。

ホテルグランドシャロンのオーナーにして大貴族のシャロン・ロプスから賜った領地に赴き、葉汁――お茶用の葉を栽培している畑の様子を見ていた恭一郎と牛の亜人クゥ。

二人が小屋に帰ろうとしたその時、突然空が裂けた。

そこから降ってきたのは、恭一郎の見知った一台の車。

異世界にあるはずのない物体が現れたことに恭一郎は驚愕したが、その車から出てきた人物を見て、さらに目を見張ることになる。

日本にいた頃の元恋人、渡辺美希だったのである。

しばらく会っていないが、確信できた。どこか……そう、髪型が変わっている。しかし、見間違えるはずもなかった。
「美希っ！　うわっ、ほんとに美希だっ！」
「えっ、うそ。きょ、恭一郎。恭一郎がいる……」
嬉しそうに美希の肩を揺らす恭一郎とは裏腹に、美希は唖然とした表情で恭一郎を見つめていた。それもそのはず。あまりの事態に、脳も身体も追いついていない。
「さ、触れる。うそ。……ゆ、幽霊じゃないわよね？」
「そんなわけないだろ、生きてるよ」
実際のところ恭一郎は一度死んでいるのだが、今はどうでもいい。恭一郎は美希の顔を見つめた。毛先がカールした茶髪。白い肌は、自分がよく知る美希の努力の賜物だ。
その耳に自分が送ったエメラルドのピアスが光っているのを見つけて、恭一郎はじわりと目尻に涙を溜める。
「きょ、恭一郎っ。ほんとに、ほんとに恭一郎なのねっ⁉」
「そうだよっ！　佐藤恭一郎だよっ！　何だよ、忘れたのか？」
美希の目も、じんわりと湿り気を帯びる。その様子に、恭一郎はにこりと微笑んだ。美希がぐっと足に力を入れたのを見て、恭一郎は両手を広げる。
二年ぶりの再会。美希は、恭一郎の腕の中に飛び込んだ。

「こ、の、馬鹿一郎うぅぅぅぅぅぅッ‼」
「って、うぎゃあああああっ‼」
飛び込んだ胸。そこから美希は標的を、広げられた恭一郎の右腕に変更する。
地面に背を向けて恭一郎の肩にジャンプし、そのまま引き倒す。両手でがっしりと掴んだ右腕は、地面に背をつけてもなお放しはしない。
押さえつけられる恭一郎の身体。腕をホールドする美希の太もも。密着した尻。しっかりと締められた膝の向こうで、恭一郎の右親指が天を指さした。
腕十字。誰でも一度は聞いたことがある、ポピュラーな関節技だ。
「なぁにが『忘れたのか？』、よぉおおおおおおっ‼」
「おれ、折れる折れるっ‼　ぎぶっ、ぎぶーっぷっ‼」
ぎちぎちと伸ばされる右腕。恭一郎は必死に地面をタップした。それを受けて美希が、ふっと右腕を解放する。
「って、てて……。お、おま。マジで折れるところだったぞ」
「そんなことどうでもいいのよっ！　な、なんで恭一郎がここにいるのよっ！」
立ち上がり、指をさして見下ろす美希。相変わらず短いホットパンツを視界に収めた後、恭一郎は顔を上げた。
「なんでって、そりゃあ。……な、なんでだろう？」

そういえば説明するのが難しいなと、恭一郎は頬を掻く。
久しぶりに見るその仕草に、美希は怒りを忘れてへたりと座り込んだ。

◆　◆

「はぁ？　異世界ぃ？」
畑から少し歩いたところにあるクゥの小屋。その中で、美希は恭一郎の説明に眉を上げた。
今はクゥに席を外してもらって二人きり。隠す必要もないと、恭一郎は美希に自分たちの現状を説明したのだ。
「あ、あんた。……頭大丈夫？」
「気持ちは分かるけど、正常だよ。美希も見ただろ、さっきの子。ああいう人間じゃない人たちが、大勢いる。というか、そういう人たちしかいない世界なんだ」
こぽこぽと、恭一郎は茶こしにお湯を注いでいく。手製の緑茶。知り合いの河童の亜人レティに作ってもらった茶具のおかげで、見た目はほぼ完璧だ。
そのお茶を、恭一郎は美希の目の前にことりと置いた。この世界でのお茶の貴重さを知らない美希は、ごく自然にそれを口に運ぶ。
「そ、そんなこと急に言われても。……ボディペイントとかじゃなくて？」

「地肌だよ。角も本物」
クゥの牛柄の肌を思い出した美希が、信じられないと恭一郎に視線を送る。確かに、まだ人間に近いクゥの見た目ならば常識のほうが勝ってしまうだろう。
「まぁ、美希も街に行けば信じるよ。……それより、なんでここに来たんだ？　まさか、美希まで自殺したんじゃないだろうな」
「はぁ？　わたしがそんなことするわけないでしょ。……って、ちょっと待ちなさい。どういう意味よ、それ」
ぎろりと、美希の眼光が恭一郎を射抜いた。
しまったと恭一郎は思ったが、すでに遅い。美希は怒りの表情を隠しもせずに、恭一郎を睨みつけていた。
「そういえば、わたし、車で事故った気がするわ。……あんたまさか」
がたりと椅子から立ち上がった美希が、恭一郎に詰め寄る。恭一郎は、乾いた笑いを浮かべながら一歩後ろに退いた。
「あんたまさか、自殺してここに来たとかじゃないでしょうね？」
「え、えっと。……はは」
恭一郎の視線が泳いだのを見て、美希の血管がぷつりと切れる。その瞬間のボディブロー。思わず衝撃に頭を低くした恭一郎の首を、背後に回り込んだ美希が締め上げた。

「ふっざけんなぁあああああッッ!!」
「ぐっ、ぐふぅっ!!」
一瞬で止められた酸素の供給が、恭一郎の意識を奪っていく。遠くなる意識の中で、恭一郎は美希の腕を必死にタップした。
それを受けてか、腕の力が徐々に緩まる。
「……ばか、いちろぅ」
しかしその腕は、そのまま前に回されて抱擁となった。そして恭一郎の頭の上を、温かな水滴が叩いていく。
「ふっ、ふざけんなよぉ。わたしが、どれだけっ。し、心配したと思ってっ……」
次第に、その雨粒は大きくなる。どしゃぶりの雨を頭に受けて、そこで初めて恭一郎は己の間違いに気がついた。
「美希、お前……」
「わたしが、わたしがあんなメール送っちゃったからぁ。きょ、恭一郎がっ。し、死んじゃったってぇ。どっか行っちゃったってぇ。ふぐっ、うおおおおおおっ」
天井に向かう、美希の泣き声。そういえば、豪快に泣く奴だったと、恭一郎は美希の顔を見上げた。
メールの文面ははっきりとは覚えていないが、『もぅ無理。二度と連絡してこないで』とか、そ

んな内容だったと思う。あの頃は就職活動がうまくいかずに余裕がなかった。
「ごめんな」
「ゆ、ゆるさないいいいい。うぐっ、うおおおおおおおッ。でも許すぅうううっ。生きてたから許すぅうううッ」
落ちてくる美希の涙を顔で受け止めて、恭一郎は美希の頬に手を伸ばした。美希はそれを掴むと、めきょりと小指を捻り上げる。
「って、痛い痛いっ！　どういうことだよそれっ!?」
「うおおおおおっ。痛がってるぅうううう。生きてるよぉおおおお」
めきめきと小指は軋み続けるも、恭一郎はまぁいっかとタップを止めた。
「……痛ぇ」
それが尊いものだと、今の自分は知っているから。

「……ごめん」
「いいよ。俺も、勝手に死んじゃってごめん」
我ながらとんでもない台詞だなと呆れつつ、恭一郎はテーブルに突っ伏す美希を見つめた。目を赤く腫らした美希は、むくりと顔を上げて恭一郎を睨みつける。
「で、なんで死んだりなんかしたのよ」

ぎろりとした視線。そこを聞くのかと笑いながら、恭一郎は困り顔で頬を掻く。今となっては大変恥ずかしい記憶である。
「うーん。なんでだろな。就職上手くいかなくて、疲れちゃって……美希に振られて、なんか全部どうでもよくなっちまった」
言ってしまえば衝動的だ。きっと、一晩寝ればあんな馬鹿なことはしなかった。
しかし、あのときは――本当にあのときは、世界が終わったと、そう思ったのだ。
「や、やっぱりわたしのせいじゃん。ふぐっ……」
「わぁっ！　泣くな泣くなっ！　美希は悪くないからっ！」
恭一郎の言葉に、美希がぐっと涙を呑み込んだ。ほっとした恭一郎はゆっくりと壁に背を預ける。
「……ほんとに、美希は悪くないよ。俺が、何にも分かってなかっただけだ」
この世界に来て痛感した。自分は生きていたいのだと。そんなことすら分からないまま、恭一郎は人生の幕を自ら下ろした。
少し大人になった恭一郎の表情を覗き見て、ぐすりと美希は顔を上げる。
「て、てゆーか。わた、わたし……別に恭一郎振ってない」
「へっ？」
美希の真剣な表情に、恭一郎は小さく声を上げた。
そんなはずはない。もう連絡をしてくるなと、そう言われて自分は美希に振られたはずだ。だからこそ、恭一郎はあの柵に足をかけた。
「振ってないって……。美希、メールで言ってたじゃないか。もう連絡してくんなって」
「ああいうときは、連絡してこいって意味に決まってるじゃんかあああ！　本気にすんなよおおおおお！　何年付き合ってんだあああ！　なんで死ぬんだよぉおおおお！」
美希の泣き声が再び小屋を揺らす。
言われてみれば、あれくらいのことは付き合っているときに何度も言われたなと、恭一郎は今さらながらに思い出した。いつだって当然にも理不尽にも怒られて、その都度仲直りをしてきたのだ。
「あー、すまん。ついに愛想尽かされたかと思った」
「うぐぅっ。た、確かにちょっと本気だったけどぉ。し、死ななくてもいいじゃんかよぉ」
美希の声に、恭一郎の肩ががくっと落ちる。本気だったのかよと、美希を半ば呆れて見つめた。
「だ、だってぇ。きょ、恭一郎怖かったんだもん。いっつも苛々してるしさぁ。誘っても、全然抱いてくれないし……き、嫌われたと、思って」
「……あー、ごめん」
確かに、美希にそれまで通りの態度が取れていたかを考えると、恭一郎自身、甚だ疑問だ。
結局、あのときを乗り越えるには二人はお互いに子供すぎた。恭一郎が崖から飛び降りたりしなくとも、二人の間で何かが変わってずれていっただろう。
それを何となく悟った二人は、恥ずかしそうに顔を見合わせた。

「……とりあえず、どうするよ？　これから」
「う、うーん。わたしに分かるわけないでしょ」
困り顔の美希に、それもそうかと恭一郎は頬を掻く。どんな経緯だろうと、美希はこれからこの世界で生きていかないといけない。
「あっ、わたし。恭一郎の家に行きたい」
ふいに、美希が手を挙げた。考えてみれば至極当然の流れだ。
しかし、とある食堂を思い浮かべて、うぐっと恭一郎は喉を詰まらせる。
「……え、えと。お、俺の家……ね」
頭に浮かんだのは、ネコミミの少女とエルフの魔法使いの何とも言えぬ表情。汗を一筋流しつつ、恭一郎は美希を見やった。
きょとんとした顔の美希が、どうしたんだと視線を送る。
実のところ、恭一郎はこの世界で未だに家を持っていない。
「だ、大丈夫だよな」
何となくよぎった嫌な予感に恭一郎は不安を抱きつつ、街の方へと視線を向けるのだった。

◆　◆

ある日の夕方、「ねこのしっぽ亭」の店長であるメオは、いつも通りに夜営業の準備をしていた。
今日は恭一郎のホテルグランドシャロンでの仕事はない。
週に半分以上は夜に店を開けるので、恭一郎と一番長く一緒にいるのは自分だといえるが、それでもメオは恭一郎と過ごせるその時間を楽しみにしている。
昼営業が終わり、恭一郎は領地の方の仕事をしに街の外へ出かけた。
少し寂しいメオだったが、楽しげに仕事に向かう恭一郎を微笑ましく見送ったものだ。
その恭一郎が今、女性を連れてねこのしっぽ亭の入り口に立っている。
「……恭さん、そちらは？」
申し訳なさそうな、困ったような、珍しく笑みの割合が少な目の、恭一郎の表情。頬を掻く癖は、もう何千回と見てきたメオである。
「え、えっと……」
「貴女（あなた）がメオさんですか⁉　私、渡辺美希と申しますっ！」
恭一郎が口ごもり、その横にいる女性が頭を地面に向けた。突然の動きに、メオも恭一郎もびくりと身体を震わせる。
「この店で働かせてくださいっ‼」
がばりと、元気よく美希の顔が上がった。
目が合ったのは、それが初めて。

「恭さんの、故郷の方ですか？」
メオは、おそるおそる目の前の人物を見つめる。夜営業までに空いた数時間で、ねこのしっぽ亭では美希の就職面接が行われていた。
テーブルを挟み、メオの対面に美希。その間で恭一郎が二人の様子を心配そうに見守っている。
「はい。日本から来ました」
「ニホン？」
いきなりの美希の発言に、メオが首を傾げ、恭一郎は噴き出した。恭一郎は慌てて美希の腕を掴み、食堂の隅へと連れて行く。
「ば、馬鹿っ！　いきなり何言ってんだっ⁉」
「ちょ、ちょっと何よっ？　何かまずかった？」
恭一郎の焦りとは裏腹に、美希は何が駄目なのかとぽかんとしている。
そんな美希に、恭一郎は自分が異世界人であることを隠しているので、不用意にバラさないようにと伝えた。
「普通に考えたら分かるだろっ。異世界から来ましたって、誰が信じるんだよっ」
「そんなの言ってみなきゃ分かんないじゃん。……てか、ふーん。そんなことも伝えてないんだ」
恭一郎の小声を受け、美希は細めた目をメオに向けた。美希の視線に不安を覚え、恭一郎は頼む

から変なことは言わないでくれよと念を押す。
「へいへい。しょーがないわねぇ、あんたに合わせてあげるわよ」
そう言いながら、美希は恭一郎の鼻を指でつついた。貸し一つだからねと、どう考えても暴利な負債を恭一郎は背負わされる。
「すみません、メオさん。わたし、あまり地元から出たことがないもので」
「……はぁ」
恭一郎とのやり取りを眺めていたメオへ、美希がにこりと笑って近づいていく。そんな美希に、メオはこくんと頷いた。
「えっと、お給料少なくていいなら、うちは大丈夫ですけど。恭さんの知り合いですし」
「ほんとですかっ⁉」
メオは、喜ぶ美希を不思議な格好だと思いつつ眺める。しかし、色々と不思議の多い恭一郎の知り合いなら、こんなものかもしれない。
メオが気になるとすれば、ただ一点。
先程からの恭一郎に、違和感を覚える。どうも、恭一郎は美希がここに住み込むことに、あまり乗り気ではないようだ。
「あの、確認なんですけど。……美希さんは、恭さんの親戚か何かで？」
ちらりと、メオは美希の耳を見つめる。エルフとしては、特殊な丸耳。恭一郎は村を出てここま

で来たらしいという事情から、同じ丸耳の美希は親戚である可能性が高いとメオは思った。だから耳のことが失礼にならないくらいに、メオは少し探りを入れた。
しかし、次の瞬間に美希から飛び出た一言は、メオの想像していないものだった。その場にいた美希以外の時間が、恭一郎も含め、ビキリと止まる。
「わたしは恭一郎の恋人です」
満面の笑みで告げる美希の声に、メオの意識が一瞬飛んだ。すぅっと戻ってきた意識の中で、美希を見上げる。
「えっ。こ、恋人、ですか？　……えっ？」
わけが分からず、美希と恭一郎の顔を順に見つめた。恭一郎の時が、完全に止まっている。それを見て、メオはゆっくりと意識を脳に染み渡らせた。
「……えと。その。……ふ、不採用ということで」
油の切れた人形のようにメオの口が動く。なんとか絞り出した言葉に、美希が「えっ」と声を上げた。

◆　◆

「キョーイチローの昔の女ぁ？」

エルフの魔法使いアイジャは、作業の手を止めて眉を寄せる。
最近立ち上げた電力会社関係の仕事を自室でしていたのだが、そこに突然メオが慌てて飛び込んできた。話を聞いてみれば、恭一郎の元恋人が来たという。
「そ、そうなんですよぉ。雇ってくれって、さっき恭さんが連れてきてっ！」
どうしましょうとメオはアイジャの胸に飛び込む。一度バウンドされながらも、それでもメオはぐいぐいとその大きな胸に顔を埋めた。
「……恭一郎が、そう言ったのかい？」
「にゃうぅ。それは、相手の方がですけどぉ。でも、なんか恭さんに雰囲気似てるし、丸耳だし。というか恭さん固まってたし。嘘は言ってないと思いますぅ」
メオの言葉に、アイジャの肩がぴくりと動いた。唯一、恭一郎が異世界人であることを知っているアイジャは、メオとは全く違う意味で今の状況を察する。
「丸耳……そんなことが。いや、あり得るのか。そもそもキョーイチローがあり得たんだから」
険しい顔でぶつぶつ呟くアイジャを、メオが不思議そうな顔で見つめた。アイジャはそんなメオに、説明できないもどかしさを感じて頭を掻く。
「とにかく、キョーイチローを責めるんじゃないよ。今回のことは、キョーイチローにとっても予想外だ」
「責める気はないですけどぉ。こ、恋人って。どどど、どうすれば……」

メオの悲痛な表情にアイジャは爪を噛んだ。メオの視線は「というより、昔の女を雇ってくれってひどくないですか？」と語りかけてきている。
確かにそうなのだが、恭一郎の葛藤を知っているアイジャには何とも言い難い。おそらく、生き別れた恋人との奇跡の再会だ。もしアイジャが同じ状況になった場合、異世界人の恋人を何処に置いておくかと言えば、やはりこの店を選択するだろう。
「……いや。それは関係ないか。そうだね、いい機会だ。キョーイチローには少し反省してもらおう」
「し、死刑ですかっ？」
アイジャの言葉に、メオが勢いよく反応する。テンパりすぎて妙なテンションになっているメオの頭を、可哀想にとアイジャは撫でた。

◆　◆

「キョーイチローの愛人のアイジャです。で、こっちは恋人のメオ」
にこやかに登場したアイジャの第一声に、しっぽ亭の客席が凍りついた。
美希がぴたりと動きを止め、恭一郎の意識が消える。一番驚いたのは、アイジャの後ろでびくびくしていたメオである。なんてこと言うのだと、猫口を最大限まで開けてアイジャを見つめた。

「……あんたが？　恭一郎の愛人？」
「はい。この店の宿部屋に住んでいます、アイジャと申します」
もう一度名前を告げて微笑むアイジャを、美希がじとりとした目で見つめる。メオは普段と口調の違うアイジャに、何故か一歩下がってしまった。
美希がアイジャの身体を上から下まで見つめる。黒いとんがり帽子に、セーラー服。そして黒いマント。しかし、そんな服装よりも、美希はアイジャの美貌と胸に目を留めた。
「あんたが？　ちょっと信じらんないわね」
女性でも、思わず振り返るほどの美貌。美希とて、この店に来るまでに街の人々を少しは見ている。アイジャがこの世界でもとびきり上等な女であることは、説明されなくても伝わってきた。
「恭一郎が愛人とか。そんな器用なことできるわけないじゃない」
はっきりとした美希の言葉に、危うくメオとアイジャは頷きそうになってしまう。しかし、そこはアイジャ。微笑みながら恭一郎の方を愛おしげに見つめた。
「そんなことないですよ。私たち両方、優しく愛してもらってます」
「ちょっ！　アイジャさんっ!?」
アイジャの発言を耳にして、恭一郎の意識が舞い戻った。慌てて立ち上がり、ちょっと待ったと手を挙げる。それをアイジャは満面の笑みで制した。
「キョーイチロー？　ここは黙ってて」

「……はい」
すごすごと、恭一郎は椅子に腰を下ろす。それを見届けて、アイジャは美希に自分の着ているセーラー服を見せつけた。
「これ、何だかお分かりでしょう？　キョーイチローの趣味で作ってもらったものです」
「……へぇ。あんたは知ってんのね」
アイジャの笑顔。その真意を美希は読み取る。ちらりとメオを見やって、再びアイジャに顔を向けた。
「愛人、ねぇ。……あんたも大変ね」
「分かっていただけたようで何より」
作り笑顔のアイジャに、美希は呆れてテーブルに肘をついた。メオを見つめ、事情を察して椅子へと背を預ける。
「恭一郎。あんた、そりゃだめだよ。ひどすぎ」
「えっ？　な、何がだよっ」
椅子を傾けながら、美希は向かいにいる恭一郎にだめ出しする。
先程の会話の意味が理解できない恭一郎は、不安を覚えて美希とアイジャを見つめた。
「……分かったわよ。ここじゃわたしが新参者ってわけね。……でも、わたしだって恭一郎の恋人だし、こちとら二年間も独り身よ？　身体疼きまくってるっての」

両手を上げて、美希はそこんとこどうしてくれんのよとアイジャを見やる。すると、アイジャは纏う雰囲気を変えて腰に手を当てた。
「まぁそこらへんも含めて、よろしくってことさね。あたしは特に、お前さんにも世話になるだろうしね」
いつもの口調。ほっとした様子のメオが、ひょこっとアイジャの背から顔を出し、警戒するように美希を見つめる。
「ふーん、それが通常営業か。なるほどね。そっちのほうが、恭一郎が鼻の下伸ばしそうだわ。……まぁ、それよりも。提案があるんだけど」
楽しげにアイジャの顔を眺めながら、美希は恭一郎へ振り向いた。察したアイジャが、にこりと笑って同じように視線を向ける。
「とりあえず、あそこにいる馬鹿ちんにさ。尋問したいんだけど、どうかな？」
「賛成」
二人の視線に晒されて、恭一郎の身体が震える。助けてとメオに目を向けるが、メオはふるふると首を振った。
「……めっ！」
ねこのしっぽ亭。本日まことに勝手ながら、臨時休業。

◆　◆

「……いい人たちね」
木と石造りの部屋の中、美希はベッドの端に腰掛けて窓の外を見つめた。
輝く二つの月を視界に捉え、小さく一つため息をつく。
「ああ、メオさんもアイジャさんもいい人だよ」
美希の傍らで、ちりちりになった前髪を触りながら恭一郎は横になっていた。
「馬鹿、そうじゃないわよ。……いきなり現れたわたしに部屋をくれて。しかもこうして、あんたとの時間を作ってくれてるじゃない」
遠くを見つめる美希の横顔を見ながら、恭一郎は少し眉を寄せる。言われた言葉の意味を考え込む恋人に、美希は女性としてくすりと笑った。
「はは、あんたには無理よ。恭一郎」
「むっ、なんだよ。俺だって、色々と考えてるんだぞ」
必死だぞとアピールする恭一郎を見て、美希は笑みを深くする。よしよしと、愛おしそうに恭一郎の頭を撫でた。
「いいのよ、あんたは。そのままの馬鹿ちんで」

「いや、馬鹿ちんはだめだろ」
久しぶりに美希に撫でられて、恭一郎はいかんいかんと頭を振った。そんな恭一郎に、美希はぽつりと謝罪の言葉を口にする。
「……ごめんね」
少し声が震えていた。恭一郎は少し驚き、ぴたりと止まる。そして、ふぅと息を吐きながら起き上がり、美希の両頬に手を添えた。
「いいって。俺のほうこそ、悪かったよ。お前のこと、全然考えてなかった」
二人とも、自分のことで精一杯だった。あのとき、互いに思いやれれば、少なくともあんなことにはならなかったはずだ。そう考え、恭一郎は何かをぐっと堪えている美希を見上げる。
美希も、心の中で頷いた。お互い様だが、それでも自分が何かを言わなきゃならない。
「……ちょっとは、考えろ。ばかいちろー」
ようやく絞り出した美希の声に、恭一郎は耳を澄ます。こんな言葉もきっと、二人の作ってきた形の一つだ。
「ごめん」
もう一度だけ謝って、恭一郎は美希の身体を引き寄せた。
「……で、どっちが本命なのよ？」

「えっ？」
唐突な美希の質問に、恭一郎は声を出した。
ベッドに座る美希に、じとりと睨みつけられ、恭一郎は思わず言葉を詰まらせる。
「ふふーん。思った通り、馬鹿ちんをしているわけね」
「ち、違うっ。これでもちゃんと考えてだな……」
そこまで言って、恭一郎は自信がなくなる。ネコミミと奇跡のおっぱいを持つ二人の顔を思い出して、自分はきちんとやれているとは言えなかった。
「メオちゃんでしょ？」
「ぶっ⁉」
動きの固まった恭一郎に、美希がにたりと口角を上げる。予期せぬ指摘を受け、恭一郎は噴き出した。
「なっ、ななっ⁉　ど、どうしてそう思うんだよっ⁉」
驚いて美希を見つめる。そんなに自分は分かりやすいのだろうか。
「あははっ。分かるわよっ。あんた、メオちゃんにだけ態度違うもの」
当たり前でしょうと笑う美希に、恭一郎は頭を殴られた思いだ。これでも一応、表面上は隠しているつもりだというのに。こんなにも簡単に見破られるのかと、恭一郎は恐怖に思い美希を見やる。
「アイジャさんも、まぁそりゃ好きなんだろうけど。なんだろ。あの人は、どっちかっていう

と……側にいてあげなきゃって、そんな感じ？」
鋭い。確かに、アイジャと恭一郎の関係はやや共依存的かもしれない。アイジャは恭一郎を求めているし、何だかんだで恭一郎もアイジャに頼りきっている。
しかし、それを僅かな時間で感づかれて、恭一郎は羞恥に頬を掻いた。
「お前、相変わらず勘がいいな」
「あはは、馬鹿。違うわよ」
再びの馬鹿発言だが、先ほどとは少し声色が変わっていた。それに気づいた恭一郎が顔を向けると、美希は優しげな瞳で見つめ返す。
「わたし、あんたの彼女だったのよ？　分かるわよ。そんくらい」
微笑み。優しいその表情を自分は確かに好きだったと、恭一郎はじっと見つめる。そして、それが過去になっていることに気がついた。
「……美希」
「いーの。その先言ったら、背骨折るわよ」
唇に指先を付けられ、ほんの少し、恭一郎の首が後ろに動く。
「二年よ？　自然消滅よ」
あっけらかんと笑う、美希の顔。恭一郎は、違うと叫びそうになった。
しかし、それを叫ぶ資格がないことに、今さらながら恭一郎は気がつく。

二年だ。独りの時間だ。それだけ、想い続けてくれていたのだ。
「……ごめん」
「こういうときに謝る癖、直ってないわねー。謝ればいいってもんじゃないって、何度言わせるつもりよ」
呆れたように笑った後、美希は恭一郎の額に右手を近づけた。そして、力を溜めた中指をぴんと弾く。
「いてっ」
「ふふふー。女たらしにはお仕置きー」
にかりと笑う美希。喧嘩の後の、懐かしい時間。それを思い出して、恭一郎は泣きそうな顔で美希を見つめる。
そんな恭一郎を、美希は真っ直ぐな眼差しで射抜いた。
美希の瞳の中に恭一郎が映り、それを恭一郎の瞳が捉える。
「わたしに悪いと思ってるなら、答えて。……世界で一番好きな女の名前を、言いなさい」
視線。逸らされることのない、視線。
その表情に、恭一郎は遠い日の時間を思い出した。
始まりは、高校のインターハイ。全国に進んだのは、自分の所属するバスケ部とレスリング部の美希だけだった。

チームで壇に上がった自分たちの横で、一人で堂々と拍手を浴びていた少女。その横顔に、ひどく惹かれたのを覚えている。
もう、きっかけは思い出せない。自然と行動を共にするようになり、自然と同じ大学に進学した。
初めての喧嘩は、美希が髪を染めたとき。部活はどうするんだと言った自分に、美希は入らないと言い切った。
女の子らしく生きたい。そう言った美希の顔が、あの壇上にいたときと同じように堂々としていたのを覚えている。
『似合うっしょ？』
明るい茶色に染めた髪。別人になったように感じて、少しだけ緊張した。
今なら、馬鹿な自分にだって分かる。
自分が、言ったからだ。
美希は強いと。俺だって勝てないと。……褒めるつもりで、言い続けたからだ。
『わたしだって、可愛いっしょ？』
きらりと光るピアスを見せつけて笑う美希に、自分は心を奪われた。
女の子らしくなりたいという、美希の願いが叶うたびに嬉しかった。
振り回されて、手が掛かって。そんな笑顔の時間が、大好きだった。
だから、言わないと。彼女にだけは、美希だけには誤魔化してはならないことがある。

「好きだ。世界で一番、メオさんが好きだ」
真っ直ぐに、言い切った。美希の瞳に向かって。
途中で止まることもせずに、言い切れた。
「……そっかぁ」
美希の視線がほんの少しだけ、下を向いた。ぐっと、堪えられた何か。一瞬。一秒にも満たぬ時間。
ふいに、パンと、両頬が叩かれた。驚く恭一郎の前には、美希の笑顔。
「よく言ったっ！　大好きだ恭一郎っ！」
流れる涙。けれど、泣いてはいない。泣いていると言っては、いけないのだろう。
恭一郎は、静かに笑った。彼女の笑顔を無駄にしないために。
「……今まで、ありがとね」
「ああ。楽しかった」
きっと、これでいいのだと美希は思う。
後悔なんて、あるわけない。愛し合った時間は、消えはしない。
髪を染めても。夢を変えても。……あの闘いの日々が、孤独な試合が、決してなくなりはしないように。
ずっと、言いたかったことがあった。あんなことがなければ、言うつもりだった。

**立ち読みサンプル
はここまで**

その言葉だけが心残りで、美希はぐっと瞼を閉じる。しかし、それも彼女は心の中にそっとしまった。
瞼を開けて、前を向く。そこには、自分を真っ直ぐに見つめる愛しい顔。
（……あぁ。やっぱり、好きだなぁ）
それが、誇らしかった。美希は十分だと胸を張る。
「頑張れよ」
そう言って、美希は恭一郎の胸を拳で叩いた。

◆　◆

「……ほんとに見るのか？」
自室の扉の前で、恭一郎は美希を見つめた。その顔に、何よと美希が唇を突き出す。
「いいじゃん、部屋見るくらい。今さらでしょ」
それとも、何か見られちゃまずいものでもあるんですかと言いたげに、美希は恭一郎をじとりと睨む。大学時代は半分同棲していたような間柄だ。恥ずかしがる必要などないはずである。
「うっ。まぁ、それはそうなんだけど」
恭一郎の額を汗が流れる。確かに、何もやましいことはない。ないのだが、事情を知らない美希